東京ジャーミイ金曜日のホタバ
2007年7月13日

人間である預言者 -2-

大切な兄弟姉妹の皆様。クルアーンによると、教えを否定した過去の諸民族は、彼らに遣わされた使者を拒む時、「私たちには天使が遣わされるべきだったのでは。」と言ったとされます。この言葉はそもそもごまかしの言い訳に過ぎず、彼らは信仰する意志をもっていなかったのです。そして「私たちの生き方に干渉させるわけにはいかない。」と言ったのです。天使のふるまいは人間によって模範とされることはありません。その性質は異なるものであるからです。もし使者が天使であったとしたら、その時には「あれは天使であり、私たちは人間である。どうしてあれを模範とできようか。」と言っていたでしょう。

ムスリムの皆様。マッカの偶像崇拝者たちも、「私たちにも天使が遣わされるべきだったのでは。」と言い、一部のキリスト教徒たちのようでした。クルアーンの教えるところによると、預言者ムハンマドに対し、「これは何という預言者か。飲み食いし、市場を歩いている。」と言っていました。彼らは人間に対し失望していたことがここからわかります。「金の宮殿を作らせてみなさい。」と彼らは言いました。「この山を金にさせてみなさい。」「この谷を金にさせてみなさい。」「陰にはしごを立てかけさせなさい。」「天使と一緒にいるところを私たちに見せさせなさい。」というようなことも言っていました。

彼らは実際、預言者ではなく、地上の全てを支配する偉大な皇帝を求めていたのです。彼らの観点において、偉大な人物であることの基準は金であり、財産であり、力であり、帝位であり、荘厳さであったからです。彼らはこういったものに対してのみ、こうべをたれるのです。そしてこれらによって、人にも頭を下げさせていたのです。これ以外、アッラーや品格、徳などに従うことは彼らの辞書にはないことだったのです。

もし彼らの要求が実現していたとしたら、彼らに預言者として天使が遣わされていたとしたら、あるいはそれ以外の要求も実現していたとしたら、彼らは信仰していたでしょうか？クルアーンはこの問いに、明白な形で「いいえ」と答えています。このようなやりとりによって始まるプロセスの最終過程は、信仰ではなく取引になっていたでしょう。だからアッラーは、彼らのそのような要求を取り入れられず、「この啓示を下したことは、彼らにとって奇跡として十分ではないというのか。」と仰せられたのです。預言者ムハンマドも教友たちも、彼らの要求に本気で相手をされることはありませんでした。

例として、イスラーム軍がバドゥルに向かう際、途中で一人の遊牧民に出会いました。遊牧民は預言者ムハンマドに「あなたは預言者なのか。」と尋ねました。「そうです。」という返事を得ると、彼は預言者を試みようとしたのです。「それなら、このラクダのおなかの中の子の性別を当ててみなさい。」と言ったのです。その場にいた教友たちは何をしたと思われるでしょうか。遊牧民のいうことを真に受けて預言者の答えを待ったでしょうか、それとも「少し待ちなさい、啓示が下されるだろうから。」と言ったでしょうか。

実際は、それらは行なわれませんでした。なぜなら彼らにとって預言者ムハンマドにこのような問いをすることは無意味であったからです。教友の一人がすぐに間に入り、「そんなことをアッラーの使徒に聞くな。私に聞け。」と言い、この遊牧民に厳しい答えを与えたのです。それは非常に厳しく、預言者ムハンマドがその教友を叱ったほどでした。

ムスリムの皆様。忘れないで下さい。人間であられたということは、預言者ムハンマドにのみ固有のことではありません。クルアーンでは、過去の預言者たちについても、人間らしい側面が言及されています。アーダム預言者については「アーダムは主に背き、誤ちを犯した。」（ター・ハー章第１２１節）ユーヌス預言者については「逃げた奴隷のようにふるまった。」（整列者章第１４０節）ムーサー預言者については「かれを拳で打って、息の根を止めてしまった。」（物語章第１５節）ダーウード預言者については「礼拝にひれ伏し、悔悟して主の御許に帰った。」（サード章第２４節）という形で、それぞれ言及があります。他の宗教的ソースでは決して見られないような「単純な過ち」が、なぜ啓示によって明らかにされているのでしょうか。それは、啓示が、聞き手に「模範となる人間」のイメージを構築させることを望んだからなのです。

つまり、あなた方がもし本当に信仰しているのであれば、預言者ムハンマドは模範とすべき人間の預言者なのです。そしてあなた方にとって最良のモデルなのです。